

都市計画と場所の思想

―場所は都市計画批判であり続けられるか

Urban Planning and Place Thinking
— Can Places Continue to Be an Urban Planning Critique?

中島 直人 東京大学
Naoto NAKAJIMA

1. はじめに

詩人であり建築家であった立原道造は、東京帝国大学建築学科に提出した卒業論文「方法論」において、家屋の建築体験を「住みよい」と「住み心地よい」に峻別し、「創造的な核」としての后者の重要性を主張した。「住みよい」は一種の機能主義の水準にあるが、「住み心地よい」は気分・情感であり、ここに至って建築と人間が分離されず、合一することになる。建築は「生きることそれ自ら」になる¹⁾。

都市計画史上に立原のような詩的透徹さを持った人材がいたかどうかは別として、立原と同様の立論＝場所的都市計画の提示がたびたび行われてきた。都市空間の抽象的把握と操作・還元、公的一元的な介入体制に見出せる機能主義的都市計画に対する批判として、場所が持つ境界性・唯一性（この場所であって他の場所ではない）を根底に据え、人々の経験や記憶を重視し、多元的主体による自治的な関与、都市と人々との分かちがたい関係の構築が提唱されてきた。本稿では、都市計画の範疇において、普遍主義的空間の覇権に対抗する場所の復権をスケッチしていきたい。

2. 都市計画における場所の復権の系譜

(1) 19世紀末から20世紀初頭：ジッテとゲデス

イギリスの都市計画の父、レイモンド・アンウィンの代表的著作『実践の都市計画』（1909年）²⁾では、「place」という単語がイタリック態で表記され、特別な意味を与えられている。「place」は、ギリシャのアゴラ、ローマのフォーラム、英国の田舎町のマーケットプレイスに至る欧州都市の中心広場のことであった。アンウィンは、「オスマンのパリ改造において、placeという言葉は交通結節点を指す言葉として保持されたが、本当のアイデアは失われた」「その意味の再生はカミロ・ジッテを待たねばならなかった」と指摘し、ジッテの仕事をplaceの復権として紹介した。

19世紀末、都市への人口集中に伴う様々な都市問題を背

景として近代都市計画が胎生の最中にあった。パリ・セーヌ県知事のオスマンは、直線幹線道路や上下水道、公園といった近代的なインフラによって中世以来の都市の体系的な改造を開始した。パリの試みは、ルネサンスの庭園様式の影響を色濃く受けた美学的なスタイル＝パースペクティブとして、しかし次第に地図上に定規で直線道路を引くことで事足りるといった機械的都市改造技術として、欧州都市で広まっていった。これを「オスマニゼーション」と呼ぶ。一方で、都市の住居やその集合に対する規制によって、都市の環境整序をはかったイギリスでは、公衆衛生法から建築条例を生み出した。ドイツでも、ザクセン一般建設法、フランクフルトの区画整理法といった郊外地の計画的形成技術の発展がドイツ公衆衛生協会に集ったプランナーたちによってもたらされた。大雑把に言えば、これらの衛生主義的都市計画が生み出す都市空間、特にイギリスの条例住宅地は、住環境の本質の何か（のちにアンウィンは「アメニティ」と同定した）を決定的に欠いていた。

オスマニゼーションや衛生主義的都市計画が席卷する欧州の状況を、「もっぱら製図板の上で合理的に設計するだけの文明には扉が閉ざされている」と批判し、別の方向性を提示したのが、ジッテの『芸術原理に基づく都市計画』（1890年）³⁾であった。都市計画におけるエンジニアの偏重に対する芸術的観点の回復の必要性を、邦題にもなった欧州諸都市の中世以来の「広場の造形」を題材として議論したものであった。ジッテは幾何学的なパースペクティブではなく、人々の体験により近い絵画的＝ピクチュアレスクな美しさを重視し、それを発現させるものとして、建物、モニュメント、街路、広場の関係性＝都市組織に着目した。ジッテと同時代に都市景観に関心を注ぎ、建物の見え方とD/Hの関係性について科学的知見を提供したヘルマン・メルテンスは、ジッテの仕事に関心を持ちつつ、ジッテが視距離や視角といった道具立てで分析をしないことに不満

を感じていた。一方、ジッテはメルテンスの仕事に関心を抱いていなかった⁴⁾。メルテンスは、静止した観察者を前提に、普遍的に応用可能な公式を探求したが、ジッテは人間の豊かな経験を基本として場の多様性や個性を見出そうとした。メルテンスは空間を、ジッテは場所を見ていた。

若い頃に生物学を修め、独自の社会進化論を探究した社会学者という異色の経歴の持ち主のパトリック・ゲデスも、近代都市計画の父の一人であると同時に、自ずから都市計画の実践的批判者であった。社会学者としてのゲデスの原点は、フランスの社会学者ル・プレイの社会調査、社会改良運動との出会いであった。ゲデスはル・プレイの社会分析視点「Lieu, Travail, Famille」を「Place, Work, Folk」と翻訳し、都市、地域に適用していった⁵⁾。ゲデスの仕事は、この場所と経済、人々との関係性を基本枠組みとしていた。

都市計画運動におけるゲデスの功績は、「診断の名に値するものの前に治療の万能薬ともっともよく宣伝されているものを採用すべきでない」という考えに基づく、都市・地域調査の確立、「本当の都市とは市民のまちで自分たちの市庁舎で自治を行い、しかも自分たちの生活を支配する精神的理想をも実現しているまちである」という考えに基づく、都市の市民教育の実践にある⁶⁾。ゲデスがエディンバラで築いた拠点アウトロックタワーは都市調査の展示空間が積層された日常実践の場であった。ゲデスは具体の場所の把握とそこへの人々の関与を都市計画にもたらした。

(2) 1960年代～1970年代：リンチとジェイコブズ

第二次世界大戦をはさんで、都市計画の機能主義は、モダニズム運動の中で定式化・空間モデル化されていった。戦後世界経済をリードしたアメリカでは、そうした定式、空間モデルを礎に、スラムクリアランス型の再開発、モータリゼーションにตอบสนองするインフラ建設がトップダウン型の都市政策のもとで実施された。一方で、人権問題、人権意識の高まりを受けて、トップダウン的な都市計画の妥当性が厳しく問われるようになった。為政者や専門家が都市を計画し、デザインすることの自明性が疑問視された。専門家自身が自己批判として計画やデザインの根拠を見つめ直し、新たなあり方を追求していく必要に迫られていた。場所的都市計画もこうした文脈の中で展開していった。

ケヴィン・リンチが『都市のイメージ』（1960年）によって、「人々が認識するものとしての都市」という見方を提示したのは、この時代の文脈においてであった。ジッテのピクチャレスクのような個別都市景観の視角的な認識に留まらず、都市スケールの構造を捉える心象を問題とした。

リンチの主題は常に place であった。『都市のイメージ』では保留された場所の意味に踏み込むために、『時間の中の

都市』（1972年、原題は「What Time Is This Place?」）では、外部の時間＝都市空間に具現されている時間とは別に、内部の時間＝内的体験としての時間が扱われた。リンチの仕事は、1970年代以降の人間主義的地理学者が目指した地点と軌を一にしているようにも映るが、リンチ自身は都市空間に立脚した介入、マネジメント手法を探求し続けた。

リンチの都市論の集大成は1981年出版の『居住環境の計画』である。技術的夢物語でも社会規則の機械的結果でもない、人間と環境との関係の仕方の考察から生まれる「場所に関するユートピア」で結ばれるこの書籍で、リンチは人間と場所との優れた適合に向けた都市空間形態の理論体系の構築を目指したが、一方で実践としては、地域自身の手によるコミュニティ・ビジュアル・サーヴェー方法の体系化にも力を注いだ。そのサーヴェーは、実空間調査と認識空間調査に分かれているが、最初のステップとして示された「場所の集積としての都市」のスケッチは、ジッテやアンウィンが主題とした place を都市スケールで認識していこうというリンチならではの視座が明確に出ている⁷⁾。

場所的都市計画を運動論として展開させたのはジェイン・ジェイコブズであった。ジェイコブズの名著『アメリカ大都市の死と生』（1961年）の宣伝文句は「都市計画家たちが私たちの都市を破壊している」であった。ジェイコブズは、先立つ1958年の論考「ダウントウンは人々のものである」⁸⁾で、「ダウントウンを計画する最上の方法は今日、ダウントウンを人々がどのように利用しているかを見ることである、ということがこの批評の前提である。すなわち、ダウントウンの力を探ることであり、そしてそれを利用し補強することである。都市の上に置くことができる論理はないのである。人々がそれをつくるのであり、建物がそれをつくるのではない。私たちは計画を人々がつくった論理に合わせなければいけない」と、都市の論理を問うていた。

ゲデスが都市の課題の同定や未来の予測のための診断を主張したのに対して、ジェイコブズはその観察力によって

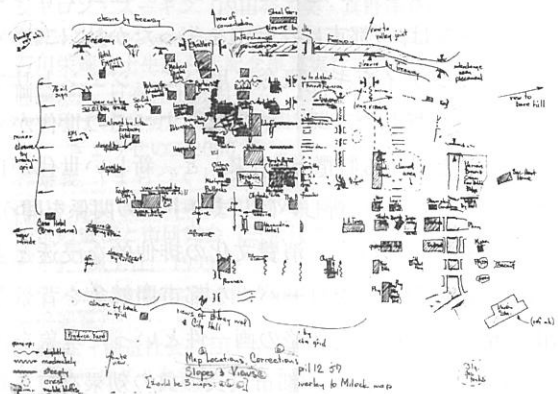


図1 リンチによる「場所の集積としての都市」スケッチ⁷⁾

び場活動である¹³⁾。公園や児童館など取り決めに制約される施設空間ではない、地域の手によって運営される場の提供運動は、全国各地への展開を見せた。市民社会による都市計画=まちづくりを实践、理論の両面でリードした林泰義は、冒険遊び場が子供達の開放区であった同時に、そこに関わった大人達にとっても、「コミュニティセンターと呼ばれる、ステロタイプ化した公共建築の味気ない集客室での大人達の“交流”や社会体育の一環として推奨される“ママさんバレー”などとは比較にならないドラマが広場にはあった」とし、「冒険遊び場というメディアから放射されたメッセージは、住民の中に次々と連鎖反応を生み出しながら、一人一人のエネルギーを解き放ちつつ、そのエネルギーを再びまちづくりへと吸収している」¹⁴⁾とした。太子堂プレイパークで冒険遊び場の運営に関わっていた研究者・専門家、地域の主婦たちが1982年度にトヨタ財団の支援を受けて作成を開始した「三世代遊び場マップ」は、場所の視点から、施設や地域を批判的に見直すリンチ以来の優れた都市のイメージマップであると同時に、世代を越えた人びとを結びつけるメディアとして機能したのである¹⁵⁾。

2000年代以降の動きについては、日本でも公民様々なレベルで呼応が見られる。道路法の改正によるホコミチ、都市公園法の改正によるPark PFIといった国の動きやそれらも活用した各都市での公共空間創出、民間開発における高質な共有空間からコミュニティのため、あるいは仲間のための小さな居場所の創出や運営まで、本号でも数多く紹介されてきたはずである。そうした中であって、情報社会固有のムーブメントとしては、「ソトを居場所に、イイバシヨに!」をコンセプトに始まった「ソトノバ」の活動が目されるだろう¹⁶⁾。2017年にウェブベースに始まった若手研究者や実践者たちのネットワークであり、SNSを通じた情報共有の仕組みである。学生も含めた若い世代への浸透性が高く、一つのプラットフォーム、タクティカル・アーバニズムの発信源となっている。そのモデルは、アメリカのStreet blog. にあたりにあると思われるが、アドボカシー的志向性は希薄に映る。そもそも、私たちの眼前の「居場所」は、立原が求めた「住み心地よい」次元にあるのだろうか。

4. これからの場所的都市計画のゆくえ

以上のように、場所的都市計画は、機能主義都市計画へのオルタナティブとして、その存在意義を得てきた。社会の変化とともに、批判の論点は変化してきたが、場所が持つ、固有性・唯一性、人々の関与を基調として、都市計画の変革に一貫して影響を与えてきたと言ってよいだろう。ただし消費社会においては、場所そのものも消費の対象とさ

れる。ゲデスのひそみに倣えば、場所と経済の関係性の再構築が課題である。リンチの場所の集積のスケッチを経済にも写し取って、一つの経済ではなく幾つもの循環的経済圏の星雲の構築が求められる。情報社会においては、場所が対抗していた空間そのものが情報へ転化し、むしろ情報空間に対する情報場所のありかたが問われているのかも知れない。まずはこれまでの場所の知見が情報空間を変えることができるか。場所的都市計画にとって、コロナ禍の経験はそのための実験の一つであったようにも思われる。

そして、消費社会、情報社会の次の創造社会のビジョンも語られている¹⁷⁾。自分たちでどれだけつくれているかが豊かさの中心、楽しみの中心に来る社会（おそらくスマートさに関心を奪われ過ぎない社会）において、場所は先導役になりうる。つまり、場所的都市計画は都市計画の批判的存在であり続けられるか、その答えは未来ビジョンにかかっている。場所的都市計画がごく普通の都市計画になり、新しいオルタナティブによって批判を受ける、そうした時代を目指すかどうか。都市計画を「生きることそれ自ら」に変えていきたいかどうか。問いが時代を動かしていく。

<参考文献>

- 1) 岡本紀子『立原道造 風景の建築』大阪大学出版会、2021年
- 2) Unwin, Raymond, *Town Planning in Practice*, Princeton Architectural Press; Reprint, 1996
- 3) カミロ・ジッテ (大石敏雄訳)『広場の造形』鹿島出版会、1983年
- 4) Ladd, Brian K., Urban aesthetics and the discovery of the urban fabric in turn of the century Germany, *Planning Perspectives*, 2(3), pp.270-286, Taylor & Francis, 1987
- 5) Meller, Helen, *Patrick Geddes Social Evolutionist and City Planner*, Routledge, 1990
- 6) バトリック・ゲデス (西村一朗訳)『進化する都市 都市計画運動と市政学への入門』鹿島出版会、2015
- 7) Banerjee, Tridib and Michael Southworth, *City Sense and City Design: Writings and Projects of Kevin Lynch*, The MIT Press, 1990
- 8) W. H. ホワイト (小島将志訳)、『爆発するメガロポリス』鹿島出版会、1973年
- 9) レイ・オルデンバーグ (美幸忠平/マイク・モラスキー訳)、『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』、みすず書房、2013年
- 10) ドロレス・ハイデン (後藤春彦訳)『場所のカーパブリック・ヒストリーとしての都市景観』、学芸出版社、2002年
- 11) シャロン・ズーキン (内田奈芳美・真野洋介訳)『都市はなぜ魂を失ったか—ジェイコブズ後のニューヨーク論』、講談社、2013年
- 12) 石川栄耀博士生誕百年記念事業実行委員会編『石川栄耀都市計画論集』、日本都市計画学会、1993年
- 13) 大村璋子『“自分の責任で自由に遊ぶ”遊び場づくりハンドブック』、ぎょうせい、2000年
- 14) 林泰義、「まちづくりプランナーの役割」、『新都市』、38(6)、pp.10-15、都市計画協会、1984年
- 15) 子供の遊びと街研究会『三世代遊び場図鑑—街が僕らの遊び場だ!』、風土社、1999年
- 16) ソトノバ (website : <https://sotonoba.place/>) (2022年4月24日最終閲覧)
- 17) 井庭崇、「創造社会における創造の美 柳宗悦とクリストファー・アレグザンダーを手がかりとして」、『モノノメ』、創刊号、pp.198-221、2021年